

〈資 料〉

## 季節を祝う食べ物

### (3) 新年を祝う十二種若菜

#### Food for Celebrating Seasons in Japan

#### (3) New Year's Food : "Jyuni-Shu-Wakana" (Rice Gruel with Twelve Young Seasonal Greens)

森田 潤 司  
(Junji MORITA)

#### はじめに

古来より、新年早春になると、上も下もござってまだ雪の残る野に出て若菜を求め、これを摘んで煮物にしたり、粥や雑炊に入れて食した。若菜摘みは冬の食生活において不足しがちな新鮮な野菜、文字通り「野」の「菜」、を求める生活上の必然からであり、現在、字面からイメージするようなどかな春の遊びではなかった。

早春に若菜を食する風習は、厳しい寒さが続くなかで芽吹く若菜に強い生命力と神秘さを感じ、若菜に秘められた力を借りて邪気を祓い万病を除くことを願ったものであるが、栄養学的に見ても冬の食生活において不足しがちなカリウム、ビタミン A、ビタミン C などの補給の面から理にかなったことであった。おそらくそれまでの食経験から若菜を食すると種々の病を避けられることが知られていたのであろう。

若菜摘みは平安時代中頃には古代中国の正月七日(人日)<sup>(注1)</sup>の七種菜羹<sup>(注2)</sup>の風習<sup>(注3)</sup>などと習合して、新春の宮中行事として型が整備され、正月七日あるいは初子の日に若菜の羹<sup>(注4)</sup>を奉るようになった<sup>(注5)</sup>。また、長寿を祝う算賀<sup>(注6)</sup>にも新年に若菜の羹<sup>(注7)</sup>を贈る習わしがあった。古くは種々の若菜、山菜を摘み集めて羹にしたのであろうが、儀式化されるに従って若菜の数が七種類あるいは十二種類と定められるようになっていった。若菜を七種類あるいは十二種類とするのは、七が陽数であることからその呪力を借りようとするものであり<sup>(注8)</sup>、十

二も吉数で若返るといふ縁起があるからである<sup>(注9)</sup>。若菜の羹のうち、七種類の若菜を用いてつくる羹は七種菜羹と呼ばれ、現在の七草粥につながるものとしてよく知られている<sup>(注10)</sup>。一方、十二種類の若菜を用いてつくる羹は十二種若菜と呼ばれるが、これについてはあまり知られていない。そこで、本稿では十二種若菜の由来や植物名をまとめる。

#### 十二種若菜の登場

文学からも奈良時代には貴族含め上から下まで若菜摘みが行われていたことが伺える<sup>(注11)</sup>。「若菜」を詠み込んだ和歌は『万葉集』<sup>(注12)</sup>(759年頃)や『古今和歌集』<sup>(注13)</sup>(905年)を始め多くの歌集にみられ<sup>(注14)</sup>、江戸時代後期の類書『古今要覧稿』<sup>(注15)</sup>(1821年~1842年頃)第四十七 時令部 若菜はこれらの和歌を収載している。

新年に若菜を食する行事には平安時代に紀貫之が著した『土佐日記』<sup>(注16)</sup>(935年頃)の記述から正月七日(人日)の若菜と初子の日の「供若菜(若菜を供ず)」の二つがあったことがわかる。

平安時代の物語においても、後でも触れる『大和物語』<sup>(注17)</sup>(950年頃)には若菜を題材とする段が十八段、八十六段、百七十三段と三つある<sup>(注18)</sup>。『落窪物語』<sup>(注19)</sup>(10世紀末)にも若菜が登場する<sup>(注20)</sup>。『宇津保物語』<sup>(注21)</sup>(970~999年頃)には、「わか菜」の語は十四箇所、「あつもの」が四箇所出て来る<sup>(注22)</sup>。とりわけ『枕草子』<sup>(注23)</sup>(995~1004年頃)と『源氏物語』<sup>(注24)</sup>(1001年以降)若菜上及び初音が正月七日(人日)の若菜及び初子の日の「供若菜」の行事を記すことは有名である。

季節を祝う食べ物

しかし、これらの書は食材を単に「若菜」とだけ記しており、具体的な若菜の種類や名前を挙げていない。おそらく当初は種々の若菜を摘み集めて羹にしたのであろうから、これらの書が書かれた頃には若菜の種類や名前は決まっていなかったのかもしれない。その後、儀式化されるに従って若菜の種類が聖数に因み七種あるいは十二種となったのであろう。

七種菜及び十二種若菜の語やその内容を具体的に示した文献は、鎌倉時代に編纂されたとする行事儀式書まで時代が下る。その一つ、『師光年中行事』<sup>18)</sup> (1259～1270年頃)では

上子日。内藏司供若菜事。内膳司同供之。

醍醐天皇延喜十八年正月七日辛巳。後院進七種若菜。

村上天皇天曆四年一月廿九日。李部王記云。是日。女御安子朝臣獻若菜云々。

十二種若菜事。若菜。薺。苜。芹。蕨。薺。葵。芝。蓬。水蓼。水雲。松。

白河院仰云。松字如何。師遠申云。

若松歎。上皇被仰云。相具松進上。僻事也。

七種菜事。薺。藜。苜。芹。菁。御形。須々代。佛座。

金谷園記云。正月七日。以七種菜作羹食之。令人無万病。

十節記云。採七種羹嘗味何。是除邪氣之術也。

又云。正月子日登岳。遙望四方。陰陽靜氣觸耳目。除憂惱之術也。(注：アンダーラインは筆者。■は判読不能)

と記す。

同様に、鎌倉時代中期の儀式書『年中行事秘抄』<sup>19)</sup> (1293～1298年頃)は

上子日内藏司供若菜事。

内膳司同供之。

十二種若菜。

若菜。薺。苜。芹。蕨。薺。葵。芝。蓬。水蓼。水雲。松。

白河院仰云。松字如何。師遠申云。若松菘。上皇被仰云。相具松進上。此僻事也。

七種菜。

薺。藜。苜。芹。菁。御形。須々代。佛座。

金谷云。正月七日。以七種菜作羹食之。令人無万病。

十節云。採七種作羹嘗味何。是除邪氣之術也。

同云。正月子日。登岳遙望四方。得陰陽靜氣。觸其目。除憂惱之術也。(注：アンダーラインは

筆者)

と記す。

鎌倉時代中期から室町時代の類書である『拾芥抄』<sup>20)</sup> (鎌倉時代中期成立。南北朝時代 1340年頃洞院公賢が増補・校訂)も歳時部第一に

正月七日。俗以七種菜作羹食之。無萬病也。薺。藜。楚。蓬。水蓼。水雲。

と記し、飲食部第二十八に

十二種若菜

若菜 菌(薺) 苜 蕨 薺 葵  
芝 蓬 水蓼 水雲

菘「芹」

七種菜

薺 藜 苜 芹 菁 御形 須須之呂 佛座

(注：アンダーラインは筆者)

と記している(注4)。

さらに、室町時代に一条兼良が著した有職故実書『公事根源』<sup>21)22)</sup> (1422年)も、

供若菜上子日

内蔵寮ならひに内膳司より正月上の子日は奉る也寛平年中より始れる事にや

延喜十一年正月七日に後院より七種の若菜を供す又天曆四年二月廿九日女御安子の朝臣若菜を奉由李部王の記に見えたり

若菜を十二種供する事あり其くさへは、若な、はこへら、苜、せり、蕨、なつな、あふひ、芝、蓬、水蓼、水雲、松とみえたり此松の字の事白川院御時師遠に御尋有しかは若松と書てこほほねと讀も若此事にて侍かと申き松をそへて奉るさてはひか事也と上皇被仰侍き

尋常若菜は七種の物也、薺、はこへら、苜、菁、御形、す、しろ、佛の座など正月七日に七種の菜羹を食すれば其人萬病なし又邪氣をのそく術に侍るとみえたり(注：アンダーラインは筆者)

と記す。

これら四書の記述から、おそらく平安時代末までに上子の日(初子の日)の「供若菜」の羹に用いる若菜は七種の他に十二種とすることが定められていたが、正月七日(人日)の若菜の羹は七種と定められていたことがわかる。

『公事根源』<sup>21)22)</sup>に「尋常若菜は七種の物也」の一文が

あることから、上子の日の供若菜の儀式でも普通は七種菜であり、十二種若菜とすることは特別であったことを推測させる。しかしながら、十二種若菜がいつ頃から始まりどのような行事の場合に十二種としたのかは不明である。

江戸後期の類書『古今要覧稿』<sup>10)</sup> (1821年～1842年頃)も十二種若菜は平安初期からあったものではないとしている<sup>(注5)</sup>。

「賀の祝い」としての十二種若菜

平安時代には長寿を祝う算賀にも新年に若菜の羹を贈る習わしがあった。『落窪物語』<sup>13)</sup> (10世紀末)第三巻八講発起に男君が落窪の君に父の中納言の算賀のために新年に若菜を差しあげるように勧める記述がある<sup>7)</sup>。

かかる程に、衛門の督、女君と語り給ふ、(道頼)「あはれ、中納言こそ、いたく老いにけれ。世人は、老いたる親のためにする孝こそ、いと孝ありと思ふ事は、七十や六十なる年・賀と言ひて、遊び・楽をして見せ給ひ、また若菜参るとて、年の始めにする事、さて、八講と言ひて、経・仏書き供養する事こそはあめれ。(注：アンダーラインは筆者)

また、『宇津保物語』<sup>14)15)</sup> (970～999年頃)嵯峨の院の巻にも

来年足り給ふ年なるを、若菜など調じて御子の日に『参らせむ』とものせらるるを、(中略)大将殿には、二十七日出で来たる乙子になむ、嵯峨の院に、御算賀参らむとし給ひける

とあり、続けて同書菊の宴の巻に

また、白銀・黄金の若菜の籠、同じ壺ども、色々の作り板どもに、よろづの宝物ども清らにしかれて、持て連れて参り給ふ(注：アンダーラインは筆者)

とある。嵯峨院の太后の六十の賀が正月の第三の子の日に催され、大将殿(正頼の殿)が若菜を差し上げるのである。

最も有名な『源氏物語』<sup>17)</sup> (11世紀初頭)若菜上巻には光源氏四十歳の賀の祝いに際して、左大臣(髭黒)の北の方(玉鬘)が、正月子の日の「供若菜(若菜を供ず)」に因んで、源氏に若菜を献じることが描かれている<sup>7)</sup>。その箇所を見ると

〔源氏は〕ことしそ四十になり給ければ、御賀の事、おほやけにも聞こしめし過ぐさず、世中の営みにて、かねてより響くを、〔源氏は〕事のわづらひ多くいかめしき事は、むかしより好み給はぬ御心に、みななかへさひ申給。

正月廿三日、子の日なる、左大将殿の北方、若菜まいり給。(中略)

かんの君も、いとよくねびまさり、ものものしきけさへ添ひて、見るかひあるさまし給り。

若菜さす野辺の小松を引きつれてもとの岩根をいのるけふかな

とせめてをとなび聞こえ給。沈のおしき四つして、御若菜、さまばかりまいり。御かはらけ取り給て、

小松原末のよはひ引かれてや野辺の若菜も年をつむべき

など聞こえかはし給て、上達部あまた南の廂に着き給。(中略)

御かはらけ下り、若菜の御あつい物まいる。御前には、沈の懸盤四、御坏どもなつかしくいまめきたる程にせられたり。(注：アンダーラインは筆者)

とある。

室町初期の南北朝時代に四辻善成が著した源氏物語の注釈書『河海抄』<sup>23)</sup> (1362年頃)巻第十三若菜上には、

正月廿三日子の日なるに左大将との、北方若菜まいり給(御記云御賀事 延長二年正月廿一日右大将藤原朝臣来自院有仰云々近間寂然甲子日朝摘若菜奉入之廿五日甲子此日自院賜子日之宴云々)<sup>(注6)</sup>

内宴記日 弘仁四年始有内宴唐太宗之奮風也 正月十二三日間有子日 者件日行 藏人或清涼記等廿日注日廿一二三日之間若有子日 使用之 倚松樹 以摩腰習風霜之難 犯和菜羹而喫 口期氣味之克調 菅丞相厚從雲林院序(注：アンダーラインは筆者)

とあり、賀の祝いに正月子の日の「供若菜(若菜を供ず)」に因んで若菜を献じることが、古例に倣った祝いであるとする。

『源氏物語』<sup>17)</sup>には若菜の内容や種類を記していないが、『河海抄』<sup>23)</sup>は、先の文に続いて若菜の内容を次のように注釈している。

十二若菜 若菜 薊 苣 芹 蕨 薺 葵 蓬 水蓼 水雲 芝 菘

此中菘はさまへの説あり 白河院に松を奉りける人あり僻事なりと仰ありけり<sup>(注7)</sup>

大外記師遠は小大根のよしを申ける 其説を用られける由舊記に見ゆ

七種 薺 薺 蓼 苣 芹 薺 御形 須々代<sup>(注8)</sup> 佛座

四十よりはしめて数の滴を賀する也 春の初若菜を摘みて是を便にて祝也 古今にも仁和御門人にわか

季節を祝う食べ物

な給ける御歌あり 是も賀を給ける也 (注：アンダーラインは筆者)

このように、賀の祝いとしての供若菜の行事では、若返りの意味を込めて吉数の十二種若菜あるいは七種菜が献じられたと推測される。

また、『源氏物語』<sup>17)</sup>若菜下巻には今度は源氏が朱雀院の五十の賀を計画した言葉として

このたび足り給はむ<sup>なぬか</sup>、<sup>わか</sup>若菜など<sup>たてまつ</sup>調じてや、などおぼして (注：アンダーラインは筆者)

とある。

『大和物語』<sup>12)</sup> (950年頃)の十八段にも

故式部卿の宮、三条の御息所に絶えたまで、またの年の正月の七日の日、若菜奉り給うけるに、

(能子) 古里とあれにし宿の草の葉も君がためとぞまづは摘みつる

とありけり。(注：アンダーラインは筆者)

とあるが、これも柿本<sup>12)</sup>によると算賀と考えてよい<sup>(注9)</sup>。北村季吟『大和物語抄』<sup>24)</sup> (1653年)巻一は、この所に注して

正月七日に七種の菜をもてこれを服するとき。人をしてやまひなからしむると。荆楚記に侍り。七種とは。なつな。はこへら。芹。菁。御形。すずしろ。仏の坐など也。又十二種供する事あり。はこへら。苜。せり。蕨。なつな。葵。芝。蓬。水蓼。水雲。松と云々、天子への内藏寮。ならびに内膳司より正月子の日にたてまつれり。

寛平年中よりはしまれるよし公事根源にみゆ。此物語のはみやすところより式部卿のみやへなるへし。

(注：アンダーラインは筆者)

と記し<sup>25)</sup>、「十二種供する事あり」として、十二種の若菜を挙げるが、内容は明らかに『公事根源』<sup>21)</sup>及び『河海抄』<sup>23)</sup>を引用したものである。

このように、平安時代、宮廷や貴族社会では、賀の祝

いを兼ねて子の日に供若菜を行う場合は、特に若返りの意味を込めて吉数の十二種若菜が献じたとみてもよからうが、このことが定められた時期は明かでない。

十二種若菜の内容

ところで十二種若菜の内容はどのようなものであろうか。江戸中期の有職故実家速水房常は『公事根源愚考』<sup>22)</sup>で、古典に記載された十二種及び七種の異同を比較している。これを踏まえてあらためて古典に記載された十二種若菜の異同を整理比較してみると、表1のようになり、十二種若菜の内容は、書物及び写本によってさまざまである。

鎌倉中期の『年中行事秘抄』<sup>19)</sup> (1293~1298年頃) (前掲)では数えてみると「若菜」を入れても十一種しかなく、「苜蓿」を苜と苜に分けて数えると初めて十二種となる。

一方、『師光年中行事』<sup>18)</sup> (1259~1270年頃)、『河海抄』<sup>23)</sup> (1362年頃)、『拾芥抄』<sup>20)</sup> (1340年頃)、室町の『公事根源』<sup>21)22)</sup> (1422年)は「若菜」を含めて十二種を挙げている。

七種菜の内容については先に引用したように『師光年中行事』<sup>18)</sup>、『年中行事秘抄』<sup>19)</sup>、『河海抄』<sup>23)</sup>、『拾芥抄』<sup>20)</sup>及び『公事根源』<sup>21)</sup>の五書とも、「菁 蕨 苜 蓿 芹 菁 御形 須須代<sup>(注10)</sup> 佛座」であり、ほぼ同じである。現在のいわゆる「春の七草」にも対応している<sup>26)</sup>。表1で十二種若菜の内容を比較してみると、若菜・苜・蕨・菁・葵・芝・蓬・水蓼・水雲・芹の十種は同じであるが、二種が異なる。『公事根源』では二種のうちひとつははこべら(蕨)であるが、『師光年中行事』<sup>18)</sup>、『年中行事秘抄』<sup>19)</sup>、『拾芥抄』<sup>20)</sup>及び『河海抄』<sup>23)</sup>の四書には蕨はない。蕨の代わりに入っているのは『師光年中行事』<sup>18)</sup>、『年中行事秘抄』<sup>19)</sup>並びに『河海抄』<sup>23)</sup>では苜(苜)であり、『拾芥抄』<sup>20)</sup>では菌である。

表1 文献にみる十二種若菜の植物名

文献	十二種												
『師光年中行事』	若菜	薺	苜	芹	蕨	菁	葵 <sup>調音</sup>	芝	蓬	水蓼	水雲	松	
『年中行事秘抄』	若菜	薺	苜蓿		蕨	菁	葵	芝	蓬	水蓼	水雲	松 <sup>河海</sup>	
『拾芥抄』	若菜		苜 <sup>オ、ハコ</sup>	芹 <sup>セリ</sup>	蕨 <sup>ワラヒ</sup>	菁 <sup>ナツナ</sup>	葵 <sup>アフヒ</sup>	芝 <sup>シハヨ ロイクサ</sup>	蓬 <sup>ヨモギ</sup>	水蓼 <sup>タテ</sup>	水雲	苜 <sup>カラシ タカナ</sup>	菌 <sup>(クサヒラキ ノコ) (薺) [園イ]</sup>
『河海抄』	若菜	薺	苜 <sup>チサ</sup>	芹	蕨	菁 <sup>ナツナ</sup>	葵	芝	蓬	水蓼	水雲	苜	
『公事根源』	若菜		苜	せり	蕨	なつな	あふひ	芝	蓬	水蓼 <sup>タテ</sup>	水雲 <sup>モック</sup>	松	はこへら

残りの一種は書により松あるいは菘である。『師光年中行事』<sup>18)</sup>、『年中行事秘抄』<sup>19)</sup>及び『公事根源』<sup>21)22)</sup>には松が入っており、『河海抄』<sup>23)</sup>や『拾芥抄』<sup>20)</sup>には菘が入っている。

江戸後期の類書『古今要覧稿』<sup>10)</sup> (1821~1842年) 巻第四十六時令部若菜の項「正誤」に

公事根源には(中略)いはゆる十二種の若菜はわかなはこへら<sup>チサ</sup>苳せり蕨なつなあふ<sup>シバヨモギ</sup>ひ芝<sup>チヂ</sup>蓬<sup>チヂ</sup>水蓼<sup>チヂ</sup>水雲<sup>チヂ</sup>菘なりといへり

拾芥抄には十二種若菜を若菜菌(観助大僧正の本に薊に作山科言継卿の本に蘭に作)苳<sup>チサ</sup>蕨<sup>シバ</sup>齊葵<sup>チヂ</sup>芝<sup>チヂ</sup>蓬<sup>チヂ</sup>水蓼<sup>チヂ</sup>水雲<sup>チヂ</sup>松(弘賢日菘の誤なり)と注されたり

されとも冬より春をかけて生出るものはそのうちには僅にてこへら苳芹蓬等の五六種に過す苳蕨葵水蓼等は共に春の末より夏の物なれば此十二種の若菜は必ず三四月頃に奉りしものにて正月子日に奉りしにはあらざる事明らけし(注:アンダーラインは筆者)

とあり、十二種若菜は内容からして早春に生えているものは少ないので正月子の日に奉ったものではなく、旧暦三月四月頃に奉ったものであろうとしている。しかし、有岡利幸『春の七草』<sup>26)</sup>は、十二種には「生植物は少なく、乾燥保存したものと考えられるものの割合が多い。ここから若菜とは、その時期の生育している青物に限定されるものではなく、乾燥品も含めて年のはじめに諸種の行事の際に提供されるものの総称であった可能性がたかい。」とする。

十二種若菜が正式でこれを簡略化して七種を用いたという説<sup>27)</sup>があるが、十二種若菜と七種菜とも共通なものは苳と齊くらいであるので、七種菜が十二種若菜の簡略されたものとは考えにくく、別のものであったと考えた方がよかろう。しかしながら、十二種の内容は一定せず、なぜこれらの十二種が選ばれたのか、またその由来も不明なままである。

### 十二種若菜の衰退

いずれにせよ、時代が下がると十二種をそろえることが難しくなったためか、乾燥品を含めた形式的なものだったためか、十二種若菜は廃れて、生ものばかりを用いる七種菜となっていった<sup>26)</sup>。

さらに七種菜を公式の年中行事として奉ることも、室町時代には廃れたようであるが<sup>8)</sup>(<sup>11)</sup>、民間では七種菜は若菜を入れた粥として広まった。江戸時代になると、二代将軍秀忠の時に正月七日が五節句の一つに定められ、七種の粥となって公式行事に復活するが、子の日の若菜

の羹はここに吸収されてしまった<sup>3)</sup>。

なお、江戸時代末期の風俗、事物を紹介した類書の『守貞漫稿』<sup>28)</sup> (1853年成立、その後も加筆)は、

天武天皇十年正月七日召親王諸王於内安殿使諸臣侍外安殿置酒賜樂云々今日の節會始此也  
宇多天皇寛平二年正月上子日勅内藏寮内膳司献若菜其後或十二種或七種云々然れば七種のかゆを食すは上子日を本とする也中古以来七日を用ふ

(注:アンダーラインは筆者)

と十二種若菜の語を記すが、この頃十二種若菜が行われた気配はない。

### 十二種若菜の植物

ここで、十二種若菜の植物名を考察する。

#### 【共通の十種の若菜】

まず、表1の五書で共通に挙げられている十種の菜(若菜・苳・蕨・齊・葵・芝・蓬・水蓼・水雲・芹)の植物名を考える。

①若菜の植物名は詳しくはわからない。十一種とは別の任意の一種かもしれないが、最初に記載されるのは奇妙である。『名数語彙』<sup>63)</sup>の七種菜にも若菜と記載されている。

②苳<sup>(注12)</sup>はチサ<sup>29)</sup>。キク科の二年草。高苳、高苳<sup>30)</sup>、白苳<sup>29)</sup>とも書く<sup>31)</sup>。

③蕨はワラビ。シダ類コバノイシカゲマ科の多年草である。有岡利幸『春の七草』<sup>26)</sup>は、都の京都では旧暦の正月の季節にワラビは得られないので、下記⑬の菌と同様に乾燥品であった可能性が高いとしている。

④齊はナズナ。アブラナ科の二年草である。七草の一つでもある。

⑤葵はフユアオイ(冬葵)。アオイ科の多年草である。

⑥芝はマンネンタケ(万年茸)。サルノコシカケ目マンネンタケ科のキノコである。『本草綱目』<sup>32)</sup> (1596年) 菜部によると「芝」はレイシ(靈芝)である。『綱目啓蒙』<sup>30)</sup> 卷之二十四 菜之五には和名に京でレイシ、勢州でマンネンダケとある。しかし、レイシは食べられないので他のキノコの一つとする説もある。

一方、芝にヨロイグサとふりがながある写本もある<sup>(注13)</sup>。しかし、ヨロイグサ(鎧草)はセリ科シシウド属の多年草で根を薬用とする<sup>33)</sup>が、葉は食用ではないので、これも受け入れ難い。

⑦蓬はヨモギ。キク科の多年草である。

⑧水蓼はミズタデ。タデ科の一年草ヤナギタデの別称である。『春の七草』<sup>26)</sup>はこの時期はミズタデの芽が出てい

ないの乾燥品ではないかとする。

⑨水雲はモズクである。モズクは褐藻類ナガマツモ目のモズク科やナガマツモ科に属する海藻の総称である(注14)。水雲は『和名抄』<sup>34)</sup>に藻類として挙げられ、和名は毛都久(纂注本<sup>29)</sup>)あるいは毛豆久(元和本<sup>29)</sup>)と訓じられている。

海藻のモズクを十二種若菜のひとつとすることについては、『祇園執行日記』<sup>35)</sup>(南北朝期)に

七種菜(中略)ナツナ。ク、タチ。牛房。ヒジキ。

芹。大根。アラム。(注:アンダーラインは筆者)

と見られるように<sup>40)</sup>、海藻類を「七種菜」に含めることもあったので不思議はない。また、江戸時代の『撰津名所図会』<sup>36)</sup>矢田部郡に若菜調貢の項があり(注15)、「生田の若菜は磯菜なるべし」とあるので、古来、今の兵庫県生田のあたりからも海藻を採って若菜として献じていたことがわかる。

⑩芹はセリ。セリ科の多年草である。七草の一でもある。

#### [古書で異なる二種の若菜]

次に古書により異なる菜の植物名について考える。

⑪薺はアザミ。キク科アザミ属の多年草の総称である。

⑫藜藜はハコベ。ナデシコ科ハコベ属でハコベラとも呼ぶ。

⑬菌はクサビラ。菌類、キノコ類の古称である。『和名抄』<sup>29)</sup>は菌(音 蒼太介)を菜類に分類している。『広辞苑』<sup>37)</sup>は「くさびら」を青物、野菜としているが、『春の七草』<sup>26)</sup>はシイタケ(椎茸)、マツタケ(松茸)あるいはイワタケ(岩茸)といったキノコ類の乾燥品であろうとする。菌が具体的には不明なためか、『古今要覧稿』<sup>10)</sup>に〈拾芥抄(中略)菌(観助大僧正の本に薺に作山科言継卿の本に蘭に作)〉(前掲)とあるように、菌を他の植物に置きかえた本<sup>(注16)</sup>もある。

⑭松は不明である。マツかもしれない。あるいは⑭の菘かもしれない。湯浅浩史『植物と行事』<sup>38)</sup>は〈マツを食べることは現在ではほとんどないが、かつてはその芽が食用とされていたのである。心臓によいと青松葉をそのままみしめることは近年まで行われていた(杉原二郎『毎日新聞』一九八八年二月三日付)〉と記す。山中『平安朝の年中行事』<sup>4)</sup>は、江戸時代の国学者石原正明の『年々随筆』<sup>39)</sup>(1804年)五 甲子随筆部に

此ごろの歌よみ、子日といふ題に、小松をよみて、若菜をよまず。子日遊の子細をしらざるなり。後撰集に、子日の歌五首ある、小松なき歌もまじれ、

ど、若菜よまぬはなし。小松も菜の一種なり。

と書かれているとし、小松を若菜の一種とする説を紹介している。さらに『年々随筆』<sup>39)</sup>の記述の続きをみると、信濃の農夫に聞いたとして

かの国にては松をくふ。四月ごろ、松のわか芽の出たるを折きて、ゆで、てくふ。松脂のけはなしといふ。そは赤松なりしか。聞もらしたり。(中略)あぢはひこそすぐれざらめ、くふに堪たる物にはあるべし。

とある。しかし、一般的にはマツは食べることはないの、マツを用いたとしてもやはり添え物であろう。『年中行事秘抄』<sup>19)</sup>(前掲)の記載からみると、院政期から十二種の中に松が挙げられていた一方で、それを疑って、たとえば菘ではないかとする説があったようである。

⑮菘も不明である。まず、コホネ説、現在のハマダイコン(ノダイコン)とする説がある。『年中行事秘抄』<sup>19)</sup>の松の割注(前掲)にもあるように、『河海抄』<sup>23)</sup>は「菘」と記載しており、「此中菘はさまざまの説あり」としつつも「菘」は「小大根」とであるとする(前掲)。平安末期の『類聚名義抄』<sup>40)</sup>僧上には草として「コホ子(菘)」とあり、野生種とされている<sup>41)</sup>。『年中行事秘抄』<sup>19)</sup>の割注(前掲)に〈菘菘和名古保欄〉とあるが、菘菘は『和名抄』<sup>29)</sup>ではこほねと訓読されている。青葉<sup>41)</sup><sup>42)</sup>は「菘菘」は現在のハマダイコン、ノダイコンであるという<sup>41)</sup>。コホネは若菜も食用になる小大根であり、根が小型であることから大根(ダイコン)に対する呼称である<sup>41)</sup>。

また、『師光年中行事』<sup>18)</sup>(前掲)は、「松の字」は「若菘か」とし、「若菘」にコホネとふりがながある。『公事根源愚考』<sup>21)</sup><sup>22)</sup>(前掲)も「若松と書てこほほねと讀也」<sup>(注17)</sup>とする。スイレン科のコウホネ(河骨・川骨)(カワホネ)かとも思われるが、『古今要覧稿』<sup>10)</sup>が「こほね」は「こおほねの中略なり」と記している<sup>41)</sup>ように、「こほね」と「こほほね(こおほね)」は同じであるとすると菘はやはりコホネとなる。

一方で、菘は古く「たかな」と訓じられている<sup>(注18)</sup>。タカナは今で云うアブラナ科アブラナ属の菜類のことであるが、菘の読み方と植物名が混乱しており<sup>42)</sup>、何を指すのか明確ではない。しかし、平安時代にタカナと呼ぶ野菜はあったことは確かである<sup>42)</sup>。

江戸時代でも混乱があり、菘をタカナ、カラシとする書もあるが、多くの書はウキナ、ハタケナ(菘菜)としている<sup>(注19)</sup>。また、『大和本草』<sup>43)</sup>や『農業全書』<sup>44)</sup>は前述した菘をダイコンの類とするコホネ説を否定してい

る(注20)。ウキナ、ハタケナはいずれもアブラナ科アブラナ属に属する不結球性の菜である<sup>41)</sup>。

結論として松は今でいうツケナ(漬け菜)(アブラナ科アブラナ属の非結球性菜類の総称)としてよからう<sup>41)42)</sup>。名の混乱はアブラナ科の菜が多く品種に分化してきたこと<sup>42)</sup>とも関係しているであろう。

なお、松の字を同じアブラナ科のスズナ(カブ、蕪菁)に当て、七草の一にも挙げることもあるが<sup>26)</sup>、これも誤りである。

### おわりに

これまで述べてきたように、宮中行事では正月七日(人日)の若菜の羹は七種の若菜でつくられたが、子の日の若菜の羹は七種とは限らず十二種あるいは七種の若菜でつくられた。七種の若菜の内容については前掲<sup>5)</sup>(注21)にまとめたので、本稿では十二種若菜の内容をまとめた。七種の若菜と十二種の若菜の使い分けは詳しくはわからないが、賀の祝いでは十二種であった可能性が高い。二つの若菜の行事は、その後米穀類でつくる「七種粥」<sup>48)</sup>とも混交して現在の「七草粥」<sup>49)</sup>となっていく<sup>3)</sup>。この変遷のなかで、宮中行事のなかで生まれた十二種若菜でつくる羹は民間に広まらなかったこともあり、やがて廃れてしまった。

### 注

- (注1) 日付けは旧暦(陰暦)。以下同じである。
- (注2) 『和名抄』<sup>29)</sup>が羹を阿豆毛乃(あづまの) (熱物)と訓じるように、日本では羹を熱い煮物や吸い物(汁を多くした煮物、熱汁)とすることが多いが<sup>34)35)46)</sup>、中国では羹は必ずしも熱汁とは限らない。『続 中国の年中行事』<sup>2)</sup>によると、羹には二つの作り方があり、一つは米穀類と菜をまぜるもの、いわゆる雑炊であり、もう一つが雑ぜないもの、いわゆる菜の吸い物である。さらに、北魏の『齊民要術』<sup>47)</sup>(530年~550年頃)に記載された羹も三分の一以上が米穀類をまぜるものであるところから、『荆楚歲時記』<sup>1)</sup>(6世紀)記載の「七種菜羹」<sup>1)48)</sup>も雑炊式の羹であったとする<sup>2)</sup>。わが国では室町時代以降に七種菜は羹から粥に入れた七種粥(今の七草粥)になっていったとされるが、すでに奈良、平安の時代から、羹には両方の調理法があったのかもしれない<sup>3)</sup>。

なお、『宇津保物語』<sup>14)15)</sup>あて宮の巻に  
七日の夜、(中略) 藤中将、白銀の厳しきほ

とぎな、くさの御粥入れて(注:アンダーラインは筆者)

とあるが、ここは七種の若菜の粥ではなく、七種の穀物の御粥(七種粥(な、くさかゆ))<sup>48)</sup>であろう。

(注3) 四十歳から始まって十歳ごとの祝いのこと。年の初めの子の日に若菜を奉った。『河海抄』<sup>23)</sup>(前掲)は先例として延長二年(924年)正月二十五日甲子の宇多法皇四十の賀を挙げている。これによれば算賀は必ずしも上子の日でなくてもよかったらしい。

(注4) 『尊経閣文庫善本影印集成 17 拾芥抄』<sup>20b)</sup>など菜名にふりがなの無い写本もある。

(注5) 『古今要覧稿』<sup>10)</sup>卷四十六 時令部 若菜の項の「正誤」には、

按に十二種の若菜は河海抄公事根源等に見えられたもこれは後世の事にて延喜の頃に奉りしものにはあらず(注:アンダーラインは筆者)

とある。同書は、さらに、七種菜の項の『春野七種考』(北野秋芳(菊塙)〔撰〕, 1814年) <sup>49)</sup>の記述に関する「正誤」で

天曆の時十二種の名物は備たりといえるは大いなる誤なり天曆の頃には七種の若菜さへその定めなきにいか<sup>12)</sup>に十二種の若菜あるべき無きにれど七種の名物はいまだ詳ならず(注:アンダーラインは筆者)

と主張している。

(注6) 『河海抄・花鳥余情』(日本文学古註釈大成源氏物語古註釈大成 第6巻)<sup>23a)</sup>所収本などには( )内の文があるが、奈良女子大学付属図書館蔵阪本龍門文庫本<sup>23d)</sup>にはこの一文を欠く。

(注7) この項は写本により異同がある。天理図書館蔵『河海抄伝兼良筆本』<sup>23b)</sup>では「白河院に松を奉りける人ありけり僻事なりと仰あり(注:アンダーラインは筆者)」とある。

(注8) 天理図書館蔵『河海抄伝兼良筆本』<sup>23b)</sup>では「酒々代」<sup>23)</sup>。

(注9) 式部卿を宇多天皇第四皇子敦慶親王に比定する説もあるが、『大和物語の註釈と研究』<sup>12)</sup>は式部卿を宇多天皇第九皇子敦実親王に比定し、このとき六十歳であったとする。

(注10) 『拾芥抄』<sup>20)</sup>は須之呂。

(注11) 室町時代の『塔囊抄』<sup>50)</sup>(1446年)巻第一正月七日は七種を挙げた後で、

但し正月七日七草ヲ献ズト云事更ニナシ

と記しており、『民間年中故事要言』<sup>51)</sup> (1718年)もこの箇所を引いている。しかしながら、『古今要覧稿』<sup>10)</sup> (1821年～1842年頃)は、『壺囊抄』<sup>50)</sup>の記述について『枕草子』などを引いて正月七日に七草を献ずる事なしと云ったのは誤りとする。<sup>あいのうしやう</sup>『壺囊抄』<sup>50)</sup>の記述は、むしろ室町時代頃になると公式行事として七種の羹<sup>あつもの</sup>を献ずることが廃れてしまったことを示すものであろう。

(注12) 京都大学電子図書館所蔵本<sup>20c)</sup>では、「苜」にチサと訓がある。『新訂増補故実叢書第22 禁秘抄考註・拾芥抄』<sup>20a)</sup>所収本(前掲)では「苜」にヲ、ハコと訓があるが、いずれも誤りであろう。

(注13) 『新訂増補故実叢書 第22 禁秘抄考註・拾芥抄』<sup>20a)</sup>所収の『拾芥抄』(前掲)。

(注14) 岩波書店刊行の日本古典文学大系『源氏物語(三)』<sup>17)</sup>若菜上の補注(山岸徳平校注)には

「すいかん」は水甘草の事であろうか。水甘草は、日本では、丁子草と言う。きょうちくとう科の多年生の草で、六十センチ程となり、五月頃に紫藍色の花が咲く。

と解説があり、「水雲」は「水寒」の写し間違いで、チョウジソウ(丁子草)と呼ばれるキョウチクトウ科の多年草のスイカン(水甘草)のことであると<sup>27)</sup>。しかし、チョウジソウ(丁子草)は有毒<sup>33)</sup>で食用にできないので、この説は受け入れがたい。しかも、チョウジソウ(丁子草)の漢名に水甘草を当てるのは誤用である<sup>31)</sup>。

(注15) 『撰津名所図会』<sup>36)</sup>矢田郡部に  
若菜調貢

菟原郡中尾村の人、生田ノ浦より若菜<sup>わか な</sup>を採<sup>とつ</sup>て禁裏<sup>きんり</sup>に献<sup>なげ</sup>る。七種<sup>しちしゆ</sup>の其一種也<sup>そのしゆ</sup>。古連於生田<sup>こゑんお</sup>の若菜<sup>わか な</sup>と呼ぶ。字多天皇の御時より始まるとかや。中頃、源平兵乱より此式例<sup>(この)しきれい</sup>中絶<sup>ちゆうぜつ</sup>しけり。文明年中、本願寺蓮如上人<sup>(この)れんじやう</sup>此辺<sup>この</sup>経回の時、此旧例<sup>(この)きうれい</sup>を申し上げ、再興ありて、今も臘月廿五日には、例年生田川の東<sup>はま</sup>の濱<sup>はま</sup>より壺町<sup>ほとつき</sup>程<sup>ほど</sup>沖<sup>おき</sup>の方<sup>かいてい</sup>、海底<sup>かいぞい</sup>に生<sup>な</sup>ふる若菜<sup>わか な</sup>を、中尾<sup>なかつ</sup>の村民<sup>そんみん</sup>これを取<sup>と</sup>つて、同村<sup>どうむら</sup>の道場<sup>どうじやう</sup>泉隆寺<sup>せんりゆうじ</sup>より、京師<sup>きやうし</sup>西<sup>さい</sup>六<sup>ろく</sup>條<sup>じやう</sup>東<sup>とう</sup>中筋<sup>なかつすぢ</sup>花屋<sup>はなや</sup>町<sup>ちやう</sup>佛照寺<sup>ぶつじやうじ</sup>へ胎<sup>た</sup>らる。また此寺<sup>このじ</sup>より鏡餅<sup>きやうもち</sup>を添<sup>そ</sup>へて、本殿寺御門<sup>ほんでんじごもん</sup>跡<sup>あと</sup>へ進<sup>すす</sup>上<sup>あが</sup>す。またこより天子<sup>てんし</sup>へ献<sup>なげ</sup>らるる事にや。

堀川百首

旅人の道さまたげこ摘<sup>(つむ)</sup>ものは生田<sup>なま</sup>の小野<sup>せの</sup>の若

菜<sup>な</sup>なりけり 師輔  
夫木

問はねどもたがためとてか津の国の生田<sup>(なま)</sup>の小野<sup>(せの)</sup>にわかな摘<sup>(つむ)</sup>らん 経季

公事根源云、(中略)

源氏若菜巻、

小松ばらすゑのよはひにひかれてや野<sup>の</sup>べのわかな<sup>わかな</sup>もとしをつむべき

按ずるに、生田<sup>なま</sup>の若菜<sup>わか な</sup>は磯菜<sup>いそな</sup>なるべし。八重垣に日〔く〕、磯<sup>いそ</sup>辺<sup>へ</sup>の若菜<sup>わか な</sup>なり。十二種<sup>じふにしゆ</sup>の中に水雲<sup>すいぐん</sup>あり。海藻<sup>かいそう</sup>の類も磯菜<sup>いそな</sup>ならんか。

新古今

けふとてや磯菜<sup>いそな</sup>つむらんいせ鳥<sup>いせ</sup>やいちしの浦<sup>うら</sup>の海士<sup>うみ</sup>の乙女子<sup>おつむすめ</sup> 俊成

(注：句読点、〔 〕内の訓及びアンダーラインは筆者)

とある。

(注16) 『新訂増補故実叢書 第22 禁秘抄考註・拾芥抄』<sup>20a)</sup>所収の『拾芥抄』。

(注17) 「若松ト書テカハホ子トヨム也」とする写本(京都大学電子図書館所蔵 平松文庫本<sup>21c)</sup>)もある。この場合、スイレン科のカワホネ(河骨、川骨)(コウホネ)である。カワホネ(コウホネ)は葉や根は食用になる<sup>41)52)</sup>。

(注18) 『本草和名』<sup>53)</sup> (918年頃)では「菘 和名 多加奈」, 『新撰字鏡』<sup>54)</sup> (898～901年)は「菜名 太加奈」, 『医心方』<sup>55)</sup> (984年)も「和名 太加奈」とする。しかし、『和名抄』<sup>29)</sup> (931～938年), では菘<sup>そう</sup>を古保欄<sup>こほらん</sup>とし、辛芥<sup>しんかい</sup>を蕪菁<sup>うしやう</sup>, 太加奈<sup>たかな</sup>, 辛菜<sup>しんさい</sup>を加良<sup>からし</sup>之<sup>し</sup>, 芥子<sup>かいし</sup>としており、『類聚名義抄』<sup>40)</sup> (11世紀末～12世紀頃)は辛芥<sup>しんかい</sup>にタカナと訓じ、菘<sup>そう</sup>にコホ子<sup>こほし</sup>と訓じる。

(注19) 例えば『多識編』<sup>56)</sup>は、自筆草稿『羅浮涉珷抄多識編』では「蕪菁<sup>うしやう</sup>アヲナ ウキナ<sup>うき</sup> 菘<sup>そう</sup>シユ ホリイレナ」と記すが、寛永八年(1631年)刊『多識編』では「古保欄 又云多賀那 今案宇岐那」となっており、ウキナに改まっている。『節用集(易林本)』<sup>57)</sup> (1596～1614年頃)は「菘<sup>そう</sup>ナ」。一方、『毛吹草』<sup>58)</sup> (1645年)は「白菘<sup>しろがらし</sup>」「菘<sup>そう</sup>」とふりがながある<sup>42)</sup>。『本朝食鑑』<sup>59)</sup> (1695年)は「菘 多加奈、辛芥<sup>しんかい</sup>」とし、芥を「加良志<sup>からし</sup>、辛菜<sup>しんさい</sup>」とする。『農業全書』<sup>44)</sup> (1697年)は菘<sup>そう</sup>をウキナ、京都<sup>きやうと</sup>でいうハタケナ(畠菜<sup>はらな</sup>)、あるいはミズナ(水菜<sup>みずな</sup>)とし、油菜<sup>あぶらな</sup>や芥<sup>かいらし</sup>と区別している。

『和漢三才図会』<sup>60)</sup> (1712年頃)は、「白菜<sup>はくさい</sup> 俗に

太加奈という」と記すが、ここでいう白菜は江戸時代後期に中国から渡来した現在の結球性のハクサイではなく、不結球性の菜である。

『綱目啓蒙』<sup>30)</sup> (1803~1805年)は菘をトウナ、シロナ、インゲンナとする。江戸時代後期に中国からトウナ(唐菜)が伝わった<sup>42)</sup>ことによる。

杉山<sup>61)</sup>や青葉<sup>41)</sup>は、菘にアブラナ属の結球性の菜であるタカナ<sup>42)</sup>を当てたのは誤りとする。とすると同様に結球性の菜であるハクサイ<sup>42)</sup>を当てるのも誤りとなる。

(注20)『大和本草』<sup>43)</sup> (1709年)巻之五 草之一菜蔬類は

菘 京都ノ水菜 ハタケ菜 天王寺菜 近江菜  
イナカノ京菜 白菜ナト云物ハ 皆菘ナリ  
〔蘭山曰此菘莖ヲ菜ノ総名トス非ナリ 菘ハ一  
種アルモノニシテ和名タウナト云 是ナリ 白菜  
トモ云 葉ノスヂ白キ故 名ク 京都ノ水菜  
以下六品皆別種ナリ 菘ニスルハ誤ナリ。〕今  
人多クハ 不知菘ヲ ホリイリナト訓シ 又  
コヲホネト訓ス 皆非也 菘ハ大根ノ類ニハア  
ラス 蕪菁ノ類ナリ 蕪菁ト相似テ一類別物也

(注：〔 〕内は小野蘭山の校注)

と記して、ホリイリナと訓じたり、コヲホネと訓じるのは、どちらも非であり、菘は大根の類ではないとしてコホネ(小大根)説を否定している。『農業全書』<sup>44)</sup>も「ほり入菜と訓ずるハ誤なり。」と記す。『古今要覧稿』<sup>10)</sup>によるとホリイリナはすずしろ(ダイコン)の一種である。

(注21)七草粥・七種粥に入れる菜の内容については、「せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのぎ、すずな、すずしろ、これぞななくさ」という和歌が知られているが、この和歌の作者は不明である。

有岡『春の七草』<sup>26)</sup>は〈二条良基の撰と伝えられる『藏玉和歌集』(成立は年は未詳だが、元中五年=一三八八ごろ?とされる)に収められているつぎの和歌である。芹ごぎやうなづなびらこ仏座すゝなすゝしろこれ七草」と記し、また、山中『平安朝の年中行事』<sup>4)</sup>供若菜の項は〈「万葉集」に、せりなづな御形はこべら仏の座すゝなすゝしろこれぞ七種とあるところから、わが国でもかなり古くから行なわれていたとみられる〉と記すが、『藏玉和歌集』<sup>62)</sup>や『万葉集』<sup>8)</sup>にはこの歌はないので誤りである。さすがに『平安朝の年中行事』初版第十三刷(2003

年)では〈「或歌」に、せりなづな御形はこべら仏の座すゝなすゝしろこれぞ七種(「河海抄」を参考にする)〉と訂正されている。

『古今要覧稿(時令部)』<sup>10)</sup> (1821~1842年成立)に  
七種を菁 繁縷 芹 菁 御形 酒々代  
佛座に定められしは四辻左大臣を始とす

とあるように、ななくさの歌の作者を『河海抄』<sup>23)</sup>の著者の四辻善成(1326~1402年)とする説もあるようだが、『河海抄』<sup>23)</sup>の記述には「これぞ七種」の語はないので歌ではない。

室町時代の『名数語彙』<sup>63)</sup>には

七種菜 初春七種菜者七星■而■給  
和歌云 芹・若菜・五行・タヒラコ・佛姓・篠  
菜■白以上 是七種  
朗詠注曰 菁・菁・芹・田平古・五行・蕪<sup>ス、シロ</sup>・佛  
姓 是也 此七種采即人、三魂七魂ト云有神七  
魄(■は判読不能箇所)

とある。

〈朗詠注曰〉については、『和漢朗詠集』(1013年)を見ると「若菜」の題があり、菅原道真の詩文が一つとその他和歌三首が所収されている。『和漢朗詠集古注釈集成』<sup>64)</sup>~<sup>67)</sup>を見ると、『朗詠江注』<sup>64)</sup>(大江匡房没年の1111年以前成立)はじめ、現存する注釈にはこの記述と一致するものはないが、

『知恩院本 倭漢朗詠注』<sup>65)</sup>若菜に

其七種者、ナツナ、ハコヘラ、セリ、ヒラコ、  
五行、ス、シロ、仏ノ坐也。

『天理図書館本 和漢朗詠集見聞』<sup>65)</sup>若菜に

其七種者、ナツナ、ハウヘラ、セリ、タヒラ  
コ、五形、ス、シロ、仏ノ座也。此七種'菜'、  
即、人'三魂七魂有。

『和漢朗詠集和談鈔(詩注)』<sup>67)</sup>子日<sup>付若菜</sup>に

七種者、芹、菁、五行、箱遍、仏'座、田平子、  
蕪、是也。

『書陵部本 朗詠抄』<sup>66)</sup>(室町初期以前成立)子日に

七種ノ菜ト者は、ナツナ、ハコベラ、セリ、タ  
ヒラコ、コキヤウ、ス、シロ、仏ノ座

『広島大学本 和漢朗詠集仮名注』<sup>66)</sup>(室町初期以前成立)子日 付若菜に

古哥<sup>ハコベラ</sup>、芹菁五行菁<sup>ス、シロ</sup>仏'座田平 蕪 此'七草。

とあり、菜名や記載順は異なるが七種が挙げられている。『広島大学本 和漢朗詠集仮名注』<sup>66)</sup>の記述に近い。

ななくさの歌の作者について、上述のように『広

季節を祝う食べ物

島大学本 和漢朗詠集仮名注<sup>66)</sup>では古歌にと  
なっているが、『国会図書館本 和漢朗詠注一』<sup>65)</sup> (院政  
期以前の成立)に

七種采之事。和泉式部<sup>7)</sup>哥、奥有之  
とあり、同書四<sup>65)</sup>に

和泉式部<sup>7)</sup>哥云 セリナツナコキヤウハコヘラ  
仏<sup>7)</sup>ザス、ナス、シラ是<sup>ハソノ</sup>七草  
とあり、和泉式部の歌とする。しかしながら、和泉  
式部の歌云々はにわかには信じがたい。

他書では、室町時代の類書『搥囊抄』<sup>50)</sup> (1446  
年) 卷第一正月七日に

正月七日<sup>7)</sup>七草<sup>7)</sup>アツモノト云ハ七種<sup>7)</sup>何々<sup>7)</sup>七種  
ト云ハ異説アル歟<sup>7)</sup>一<sup>7)</sup>准<sup>7)</sup>或歌ニハ

セリナツナ五行<sup>7)</sup>タヒラク佛<sup>7)</sup>座<sup>7)</sup>アシナミ、ナシ  
是ヤ七種

芹五行<sup>7)</sup>ナツナ<sup>7)</sup>ハロヘラ佛<sup>7)</sup>座<sup>7)</sup>ス、ナ<sup>7)</sup>ミ、ナシ  
是ヤ七クサ

又或日記ニハ<sup>ナツナ</sup>齋<sup>ハコベラ</sup> 藜<sup>7)</sup> 萋<sup>7)</sup> 五行<sup>7)</sup> ス、シロ 佛<sup>7)</sup>  
座<sup>7)</sup>田<sup>7)</sup>ビタコ是等也ト云

但シ正月七日七草ヲ献ズト云事更ニナシ (注：  
アンダーラインは著者)

とあり、或歌や或日記にと記す。また、前稿<sup>3)</sup>で述  
べたが室町時代に梵灯 (1349-1417年) が著した連歌  
の注解書『梵灯庵袖下集』<sup>68)</sup>十九番に

せりなづな ごぎやうはこべら 仏のざ すずなすず  
しろ是は七種

の歌が所収されている。『国会図書館本 和漢朗詠  
注』<sup>65)</sup>などの記載から、ななくさの歌は、作者不詳  
ながら、平安院政期から末期にはあったものと推測  
される。

引用文献

- 1) 宗 懐 [撰]、守屋美都雄 [訳注]、布目潮瀧・中  
村裕一 [補訂]: 『荆楚歳時記』, 平凡社, 1978,  
東洋文庫 324
- 2) 中村 喬: 『続 中国の年中行事』, 平凡社, 1990
- 3) 森田潤司: 「季節を祝う食べ物 (2) 新年を祝う七  
草粥の変遷」, 同志社女子大学生生活科学, 44, 84-  
92, 2010
- 4) 山中 裕: 『平安朝の年中行事』, 塙書房, 1972
- 5) 山中 裕・鈴木一雄 [編]: 『平安時代の文学と生  
活 平安時代の儀礼と歳事』, 志文堂, 1991, 國  
文学解釈と鑑賞別冊
- 6) 葉 舒憲・田 大憲 [著]、鈴木博 [訳]: 『中国

- 神秘数字』, 青土社, 1999
- 7) 廣瀬忠彦: 『古典文学と野菜』, 東方出版, 1998
- 8) a. 佐竹昭広ほか [校注]: 『萬葉集』, 岩波書店,  
2003, 新日本古典文学大系 1-4 / b. 伊藤博  
[著]: 『萬葉集釋注』, 集英社, 1995
- 9) 紀 友則ほか [撰], 小島憲之・新井栄蔵 [校  
注]: 『古今和歌集』, 岩波書店, 1989, 新日本古  
典文学大系 5
- 10) 屋代弘賢 [編]: 『古今要覧稿』, 原書房, 1982  
(覆刻原本明治 39 年, 国書刊行会)
- 11) 紀 貫之 [著], 長谷川政春ほか [校注]: 『土佐  
日記』, 岩波書店, 1989, 新日本古典文学大系 24
- 12) 柿本 奨: 『大和物語の注釈と研究』, 武蔵野書  
院, 1981
- 13) 柿本 奨: 『落窪物語注釈』, 笠間書院, 2001
- 14) 宇津保物語研究会 [編]: 『宇津保物語 - 本文と索  
引 -』, 笠間書院, 1973 (注: 前田本の翻刻)
- 15) 室城秀之 [校注]: 『うつほ物語 全』, おうふう,  
1995
- 16) a. 松尾 聰・永井和子 [校注・訳]: 『枕草子』,  
小学館, 1974, 日本古典文学全集 11 / b. 清少納  
言 [著], 渡辺実 [校注]: 『枕草子』, 岩波書店,  
1991, 新日本古典文学大系 25
- 17) a. 柳井 滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男  
・藤井貞和・今西祐一郎 [校注]: 『源氏物語』,  
岩波文庫, 1995, 新日本古典文学大系 19-23 /  
b. 紫式部 [著], 阿部秋生・秋山 虔・今井源衛  
[校注・訳]: 『源氏物語』, 小学館, 1972, 日本古  
典文学全集 12-17 / c. 山岸徳平 [校注]: 『源氏  
物語』, 岩波書店, 1961, 日本古典文学大系 14-18
- 18) 『師光年中行事』 (塙 保己一 [編], 太田藤四郎  
[補]: 『續群書類従 第十輯上』 卷第二百五十  
四, 続群書類従完成会, 1959, 所収) (注: 中原  
師光 [1204-1265 年] 著)
- 19) 『年中行事秘抄近代』 (塙 保己一 [編]: 『群書類  
従 第六輯』 訂正三版, 卷第八十六, 続群書類従  
完成会, 1960, 所収)
- 20) a. 洞院公賢 [撰], 洞院実熙 [補修]: 『拾芥抄』  
(『新訂増補故実叢書 第 22 禁秘抄考註・拾芥  
抄』, 故実叢書編集部 [編], 明治図書出版・吉川  
弘文館, 1952, 所収) / b. 洞院公賢 [撰], 前田  
育徳会尊経閣文庫 [編]: 『拾芥抄』 上中下, 八木  
書店, 1998, 尊経閣善本影印集成 17 / c. 藤原実  
熙 [著], 清原業賢・清原国賢 [筆]: 『拾芥抄』

- 上中下, 京都大学電子図書館所蔵本)
- 21) a. 一条兼良〔撰〕:『公事根源』(慶安2年〔1649年〕版, 早稲田大学古典籍総合データベース所蔵本)／b. 松下見林〔撰〕:『公事根源集釈』上中下(元禄7年〔1694年〕版, 早稲田大学古典籍総合データベース所蔵本)／c. 京都大学電子図書館所蔵 平松文庫『公事根源』
- 22) 速水房常:『公事根源愚考』(『新訂増補故実叢書第23』, 故実叢書編集部〔編〕, 明治図書出版, 1951, 所収)
- 23) a. 四辻善成:『河海抄』(『河海抄・花鳥余情』, 日本図書センター, 1978, 日本文学古註釈大成源氏物語古註釈大成 第6巻 所収, 本井豊頼・木村正辭・井上頼顯〔校訂〕『國文注釋全書』版復刻)／b. 『河海抄 傳兼良筆本』, 天理圖書館善本叢書和書之部編集委員会〔編〕, 天理大學出版部, 1985, 天理圖書館善本叢書和書之部第70, 71巻)／c. 四辻善成〔著〕, 源惟良〔撰〕:『河海抄』第1-20, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所蔵本)／d. 『河海抄』20冊, 奈良女子大学付属図書館蔵, 阪本龍門文庫善書電子画像集所蔵本)
- 24) 本多伊平〔編著〕:『北村季吟 大和物語抄 付大和物語別勘・大和物語追考』, 和泉書院, 1983
- 25) 物集高見:『廣文庫』再版, 廣文庫刊行會, 1926
- 26) 有岡利幸:『春の七草』, 法政大学出版局, 2008
- 27) 永山久夫:『日本古代食事典』, 東洋書林, 1998
- 28) 室松岩雄〔編〕:『類聚近世風俗史』上下巻, (原名 喜多川守貞〔著〕:『守貞漫稿』), 榎本書房, 1927
- 29) 源 順〔撰〕:『和名抄』(『諸本集成 倭名類聚抄本文篇・索引篇・外篇』増訂再版, 京都大學文學部國語學國文學研究室〔編〕, 臨川書店, 1971, 所収)
- 30) a. 小野蘭山〔著〕, 杉本つとむ〔編著〕:『本草綱目啓蒙:本文・研究・索引』, 早稲田大学出版部, 1974)／b. 小野蘭山〔著〕:『本草綱目啓蒙』, 平凡社, 1991, 東洋文庫531, 536, 540, 552
- 31) 木村陽二郎〔監修〕:『図説 草木名彙辞典』, 柏書房, 1991
- 32) a. 李 時珍〔撰〕:『本草綱目』, 香港, 商務印書, 1974(注:原本は中国万歴十八年-1590年成立)／b. 李時珍〔著〕, 鈴木真海〔訳〕, 白井光太郎〔校注〕:『国訳本草綱目』新註校定, 春陽堂書店, 1979
- 33) 牧野富太郎:『新訂 牧野新日本植物圖鑑』, 北隆館, 2000
- 34) 関根真隆:『奈良朝食生活の研究』, 吉川弘文館, 1969
- 35) 『祇園執行日記』(塙 保己一〔編〕:『群書類従第二十五輯 雑部』訂正三版, 卷第四百五十五, 続群書類従完成会, 1960, 所収)
- 36) a. 秋里籬篤〔著〕:『撰津名所図会』, 臨川書店, 1996, 版本地誌大系10)／b. 秋里籬篤〔著〕, 竹原春朝齋〔図画〕:『撰津名所図会』正統編, 寛政8-10年〔1796-1798年〕(早稲田大学図書館古典籍総合データベース所蔵本)
- 37) 新村 出〔編〕:『広辞苑』第三版, 岩波書店, 1983
- 38) 湯浅浩史:『植物と行事-その由来を推理する』, 朝日新聞社, 1993
- 39) 石原正明:『年々随筆』(『日本随筆大成』第1期21, 日本随筆大成編輯部〔編〕, 吉川弘文館, 1976 所収)
- 40) 菅原是善〔著〕, 正宗敦夫〔編纂校訂〕:『類聚名義抄』, 現代思潮社, 1978, 覆刻日本古典全集
- 41) 青葉 高:『野菜の日本史』, 八坂書房, 1991
- 42) 青葉 高:『日本の野菜』, 八坂書房, 1993
- 43) 貝原篤信〔原著〕, 白井光太郎〔考註〕(第1冊), 岸田松若・田中茂穂・矢野宗幹〔考註〕(第2冊):『大和本草』, 有明書房, 1975
- 44) 宮崎安貞〔著〕:『農業全書』(山田龍雄ほか〔監修〕日本農書全集 第12巻・第13巻, 農山漁村文化協会, 1978, 所収)
- 45) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部〔編〕:『日本国語大辞典 第二版』, 小学館, 2000
- 46) 国史大辞典編集委員会〔編〕:『国史大辞典』, 吉川弘文館, 1979
- 47) a. 賈思勰〔撰〕, 西山武一・熊代幸雄〔訳〕:『校訂譯註 齊民要術 上・下』, 農林省農業総合研究所, 1957)／b. 田中静一ほか〔編訳〕:『齊民要術 現存する最古の料理書』, 雄山閣出版, 1997(注:後魏時代532年から549年頃成立。賈思勰(かしきょう)が選んだ中国に現存する最古で最も完全な総合農書)
- 48) 森田潤司:『季節を祝う食べ物(1) 新年を祝う七種粥と小豆粥』, 同志社女子大学生生活科学, 44, 79-83, 2010

季節を祝う食べ物

- 49) 神宮司廳〔編〕：『古事類苑』5版〔縮刷〕普及版、吉川弘文館、1981／国立日本文化研究センター『古事類苑』全文データベース所収
- 50) 行誉〔著〕、正宗敦夫〔編纂校訂〕：『堪囊鈔』、現代思潮社、1977、覆刻日本古典全集
- 51) 蔀 遊燕〔編〕：『民間年中故事要言』、1718（早稲田大学図書館古典書籍データベース所蔵本）
- 52) 橋本郁三：『食べられる野生植物大事典－草本・木本・シダ』、柏書房、2003
- 53) 深江輔仁〔著〕、正宗敦夫〔編纂校訂〕：『本草和名』、現代思潮社、1978、覆刻日本古典全集
- 54) 京都大学文学部国語学国文学研究室〔編〕：『新撰字鏡（天治本 附享和本・群書類従本）』増訂版、臨川書店、1967
- 55) 丹波康頼〔撰〕、榎 佐知子〔全訳精解〕：『医心方 卷三十 食養篇』、筑摩書房、1993
- 56) 『多識編 自筆稿本刊本三種研究並びに総合索引』影印篇・索引篇、中田祝夫・小林祥次郎〔編〕、勉誠社、1977、古辞書大系（注：自筆草稿『羅浮涉獵抄多識編』、寛永7年刊『多識編』、寛永8年刊『多識編』及び『改正増補多識編』の複製を影印篇と索引篇に分冊刊行したもの）
- 57) 与謝野 寛・正宗敦夫・与謝野晶子〔編纂校訂〕：『易林本 節用集』、現代思潮社、1977、覆刻日本古典全集／早稲田大学古典籍総合データベース所蔵『易林本 節用集』（注：節用集は室町時代中期頃に成立した国語辞典。易林本は慶長年代〔1596～1614年頃〕成立。なお、伊勢本や饅頭屋本には菘菜の項がない。）
- 58) 松江重頼〔著〕、加藤定彦〔編〕：『初印本 毛吹草』影印篇・索引篇、ゆまに書房、1978
- 59) 人見必大〔著〕、島田勇雄〔訳注〕：『本朝食鑑1』、平凡社、1976、東洋文庫296
- 60) 寺島良安〔著〕、島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳〔訳注〕：『和漢三才図会17』、平凡社、1985、東洋文庫527
- 61) 杉山直義：『中国本草書、農書の中の野菜〔4〕、農業および園芸、第63巻第10号、1153-1156、1988
- 62) 『藏玉和歌集』（『群書類従 第十六輯和歌部』訂正三版、続群書類従完成会、1959、所収）
- 63) 『名数語彙』、古辞書叢刊行会〔編〕、古辞書叢刊行会、1973（注：室町末期写本 静嘉堂文庫蔵本の複製）
- 64) 伊藤正義・黒田 彰・三木雅博〔編著〕：『和漢朗詠集古注釈集成 第一巻』、大学堂書店、1997
- 65) 伊藤正義・黒田 彰〔編著〕：『和漢朗詠集古注釈集成 第二巻上』、大学堂書店、1994
- 66) 伊藤正義・黒田 彰〔編著〕：『和漢朗詠集古注釈集成 第二巻下』、大学堂書店、1994
- 67) 伊藤正義・黒田 彰〔編著〕：『和漢朗詠集古注釈集成 第三巻』、大学堂書店、1989
- 68) 『梵灯庵袖下集』（新編国歌大観編集委員会〔編〕：『新編国歌大観 第五巻』、角川書店、1983、所収）

(2011年11月9日受理)